

第3章 「交野の歴史文化」の特色

本市の最大の特色は、豊かな自然にあります。先人たちはこの「自然」との関わりによって古来より今日まで続く「交野の文化財」とそれらに関連する「周辺環境」からなる「交野の歴史文化」を生み出し、育んできました。これらの「交野の歴史文化」の効果的な保存と活用の取組みを実現する上では、個々の文化財のつながりを整理し、「交野の歴史文化」の特色を踏まえることが重要です。

主要な「交野の歴史文化」は、以下の6つの特色として整理できます。

交野の王 天野川 巨石信仰 交野の城 伝統的な集落 交野の近代産業

3-1. 交野の王が築いた歴史文化（古墳時代成立）

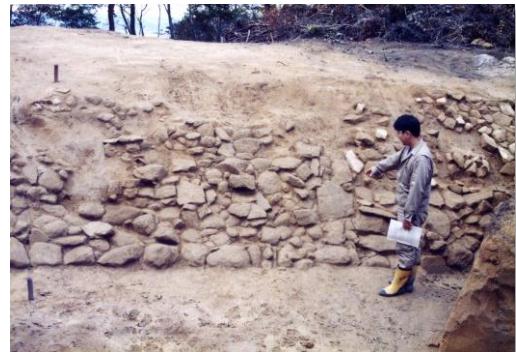
市域南部の丘陵部において、古墳時代全般にわたって古墳の造営が見られます。これらの古墳から、地域を支配した「王」の存在を知ることができます。

古墳時代前期では、森地区の山中に「森古墳群」が形成されます。最初に築造された古墳は、標高 200mの高所に位置する全長 67mの前方後方墳「鍋塚古墳」です。次にこの古墳の北側の丘陵をやや下った所に全長 106mの前方後円墳「雷塚古墳」が築造されます。続いて徐々に丘陵を下りながら「向山古墳」(全長 58m)、「森3号古墳」(全長 46m)、「森4号古墳」(全長 50m) の順に築造されています。「森古墳群」は前方後方墳 1基、前方後円墳 4基、円墳 3基で構成されています。

古墳時代中期になると、寺地区の丘陵の縁辺あるいは平野部に、前方後方墳 1基、前方後円墳 1基、方墳 1基、円墳 3基からなる「交野車塚古墳群」が形成されます。そのうち、「大畠古墳」はこの時期の北河内で最大級の前方後円墳であることが確認されています。

本市の古墳文化の特色は、南部の山中や丘陵あるいはその縁辺の平野部に集中していることで、この地域が墓域として意識されています。前期の森古墳群では、その築造順位や位置関係から王の系譜をたどることができます。また、中期の交野東車塚古墳に短甲をはじめとした大量の鉄製品が副葬されていたことは交野における古墳時代社会の様相を如実に物語っています。

後期に入ると墳丘は小さくなりますが、「塚穴古墳」を含む「寺古墳群」や「倉治古墳群」が築かれています。



森古墳群第6号古墳（鍋塚古墳）



交野東車塚古墳出土短甲（府指定）



寺古墳群第3号古墳（塚穴古墳）

3-2. 天野川の流れが生む歴史文化（平安時代成立）

「天野川」上流の「磐船峡」は、生駒金剛紀泉国定公園内の中に位置します。無数の花崗岩の巨石や奇岩の合間に天野川の清流が荒々しく流れ、さらには落差7mを超える一枚岩を激しく流れ落ちる「鮎返しの滝」を見ることのできる景勝地として大阪府指定名勝となっています。

天野川の下流は、様相を一変して直線的で穏やかな流れとなります。『伊勢物語』では惟喬親王のお伴で天野川に来ていた在原業平が、天野川を天上の「天の川」に見立て、「狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来にけり」と詠みました。このような天野川と七夕の和歌は、平安時代に盛んに作られ、その後も時代ごとに詠まれ続けました。鎌倉時代後期の続拾遺和歌集に「あふことは今日も交野の天の川此のわたりこそうきせなりけれ」、室町時代後期の俳諧連歌撰集の犬筑波集に「七夕も雨にやあはむ天の川あはれ交野の蓑をかさばや」、江戸時代初頭の晚花集に「天の川星のぬる夜は少きを交野の鷹のあはぬ日はなし」がおさめられています。江戸時代の儒学者貝原益軒は、獅子窟寺から天野川を眺め「あたかも天上の銀河の形のごとし」と『南遊紀行』に記しました。

和歌などを通じて七夕の物語と関連づけられ、著名になっていた天野川の存在は、織姫を祭る「機物神社」の成立にも何らかの影響を与えた可能性があります。同社で行われる「七夕祭」は、現在広く知られるようになっています。



鮎返しの滝



天野川



七夕祭

3-3. 巨石信仰がもたらした歴史文化（鎌倉時代成立）

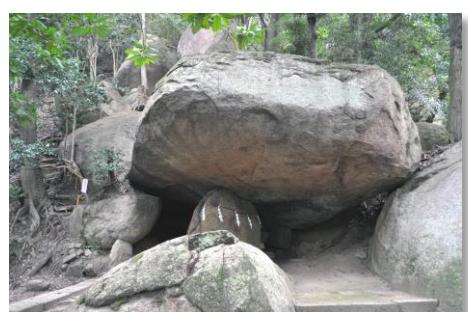
市域の南部から東部にかけては、花崗岩類からなる山地が占めます。この山間部には、風化により露出した花崗岩の巨石が多くみられます。さらに、自然が持つ稜線の美しい山並みや、山麓のうるおいのある水辺空間、多様な生物の生息・生育環境などの魅力を目的に、多くのハイキング客が訪れます。

「交野山」山頂には3か所の巨岩があります。中央の「観音岩」と呼ばれる巨岩には聖観音を現わす梵字「サ」が、観音岩の南側の巨岩には竈神として知られる三宝荒神の梵字「ウン」が、観音岩の北側の巨岩には大日如来の梵字「ア」が彫られています。

「獅子窟寺」のある普見山の山中にも、多くの巨石・奇岩があります。吠える獅子にたとえられた「獅子の岩」は、寺の名前の由来にもなりました。他に「観音岩」、「男岩」、「天福岩」、「鏡岩」、「みろく岩」、「龍岩窟」、「牛臥岩」、「虎嶋岩」があります。



観音岩（交野山）



獅子の岩（獅子窟寺）

「磐船神社」のご神体「天の磐船」は、船形の巨岩で、高さ、幅ともに 12m あります。物部氏の祖神ともいわれる饒速日命がこの岩に乗って降臨した所は、花崗岩の切り立った断崖が特徴的な「哮が峰」(たけるがみね又はいかるがみね)と伝えます。

「星田妙見宮」のご神体は、2つの巨岩をあわせて「織女石」と呼ばれています。平安時代、獅子窟寺で弘法大師が修行していた時、天から北斗七星が、星田の「光林寺」、「星の森」、「妙見山」の3か所に降りたという伝説があり、「八丁三所」と呼ばれています。星田妙見宮もその1つです。

そのほか、「竜王山」山頂の「竜王石」など、交野の山間部に見られる巨石・奇岩は古くから信仰の対象となり、山岳信仰あるいは修験道との関わりの中で独自の宗教社会を形成し、多くの伝説や伝承も生み出しました。



天の磐船（磐船神社）

3-4. 交野の城に残る歴史文化（室町時代成立）

室町時代になると、京都・大阪・奈良の中間点に位置する交野は、交通の要衝として注目されるようになります。「東高野街道」によって京都や河内国の中心に通じている上に、「磐船街道」や「かいがけの道」によって奈良側から大阪側へ入るための玄関口でもあったことが大きな要因と言えます。

こうした環境下で交野を拠点とした武将安見右近は、最初は星田で活動した後、「私部城跡」を拠点として、元亀元(1570)年頃に織田信長に味方する私部城主として歴史の表舞台に立ちました。

当時は交野城とも呼ばれた私部城は、交野郡の中心の城として機能しており、この城を攻めようとした松永久秀軍と、防衛しようとした織田信長の軍勢による合戦も起きています。

城は、台地上の地形を活かし、堀を備えた連郭式の平城として築かれています。城の周辺の発掘調査においても、「私部南遺跡」や「でがしろ遺跡」に同時代の遺構や遺物が確認されています。

室町時代の平城は私部城以外に市内ではありませんが、この時期、社寺を城に転用したとみられる例として、星田の「新宮山遺跡」や「小松寺跡」、倉治の「岩倉開元寺跡」などがあります。新宮山遺



私部城跡（市史跡・私部地区）



新宮山遺跡（星田地区）

跡にあった新宮山八幡宮については、安見氏が石清水八幡宮へ供える米を横領したとする記事があります。岩倉開元寺跡については、織田信長によって焼討ちされたと地元に伝わっています。

3-5. 伝統的な集落に継承された歴史文化(江戸時代成立)

江戸時代の星田、傍示、寺、森、郡津、倉治、私市、私部の8か村を受け継ぐ市内各地区では、伝統的な民家や道、水路などから構成される近世以降の集落が良好に残っています。

「北田家住宅」は江戸時代の私部村の代官・庄屋屋敷です。主屋、蔵などの主要な建物が残り、豪壮な屋敷構えを現在も保っており、特に表門は、現在、住宅に残る長屋門としては、日本一の長さを誇るといわれます。このほか棟札などの記録から、主屋が宝永から享保年間(1708～1734)、表門が天保14(1843)年と建築年代が明らかであることも大変貴重です。

寺村の庄屋であった「山添家住宅」は、主屋の棟札から宝永2(1705)年の建築年代が確認された市域最古の例で、寄棟造の茅葺屋根が江戸時代の庄屋屋敷の姿を今に伝えています。

また、星田村には徳川家康と当時の領主市橋家と村長平井家の縁を伝える市指定文化財の「神祖嘗趾之碑」があります。

市指定文化財の「星田村絵図」をはじめとして、「私部村絵図」など当時の各村の様子を描いた絵図によって、江戸時代に成立した伝統的な集落景観が、今日に残っていることが分かります。これらの絵図は本市の歴史を考える上で不可欠の資料です。

これらの伝統的な集落には、江戸時代以来の造り酒屋である「大門酒造」と「山野酒造」が現在も営業しており、伝統的な文化が維持されています。

そして、江戸時代に交野・枚方市域で盛んであった「交野節」や地元に残る「私市おどり」、各地区的「だんじり」などの伝統的な文化と文化財が、時代の大きな変化にも関わらず、地域の人々によって継承されています。このほか、市内に残る木綿製品やその機織り道具をもとにして、一度途絶えた「河内木綿」の製作技術の復元を試みています。そして復元された技術で織った木綿を「交野木綿」と呼んでいます。



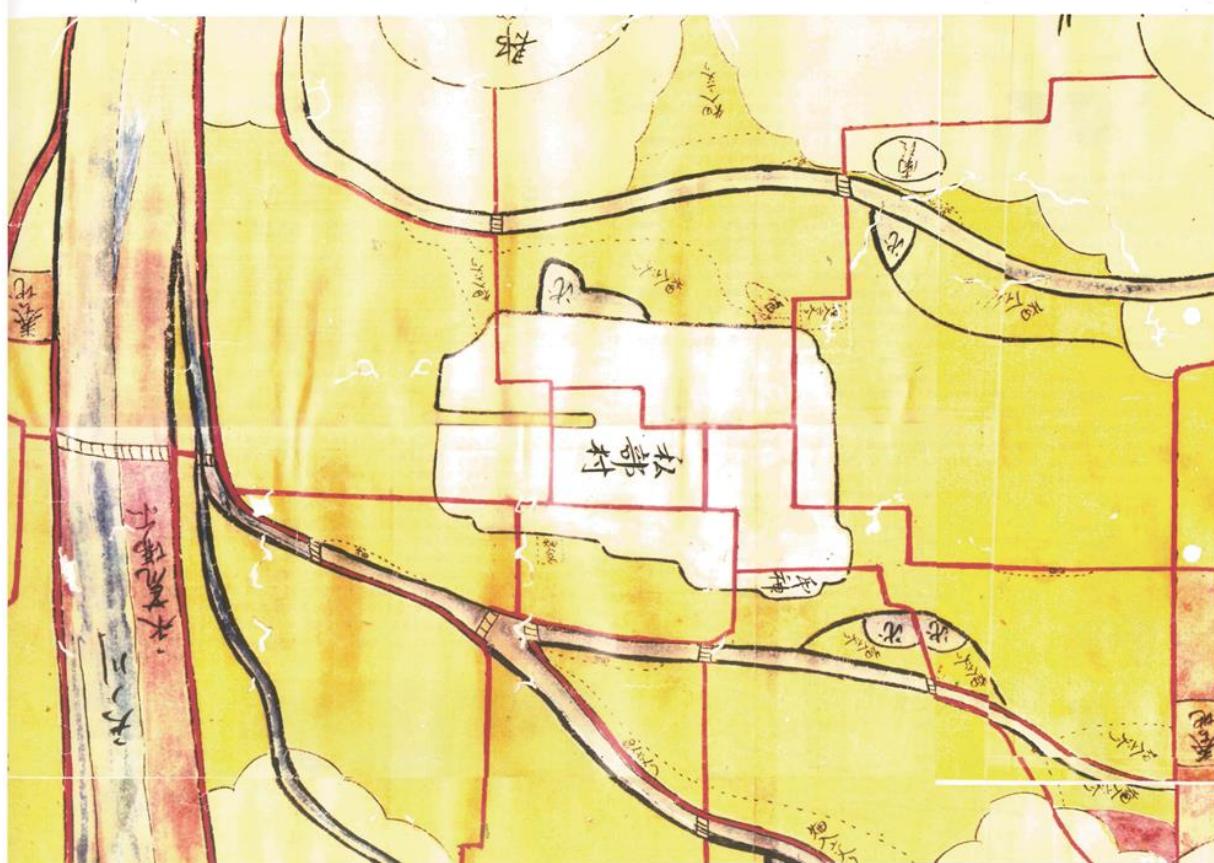
北田家住宅（国重要文化財）



山添家住宅（国重要文化財）



だんじり（私部住吉神社）



私部村絵図（江戸時代後期頃）
私部村とその周囲に広がる耕作地などが描かれています。



元禄 10(1697)年星田村絵図（市指定有形文化財）
手前に流れる天野川のほとりに星田の集落が見られます。集落の周りは田畠が広がります。
山の麓には星田妙見の森も描かれています。

3-6. 交野の近代産業が織りなす歴史文化（明治時代成立）

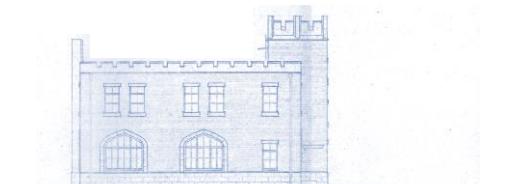
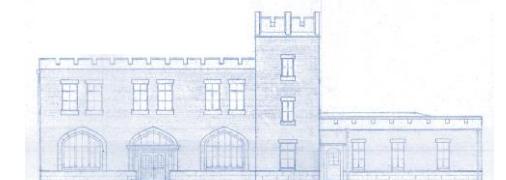
金澤泰治氏は大正11(1922)年に交野無尽合資会社を設立し、北河内でいち早く銀行業を開始しました。本社屋は当時の交野町に寄贈され、現在は歴史民俗資料展示室を併設した「**交野市立教育文化会館**」として活用しています。昭和4(1929)年建設当時の設計図の原本も残されています。

本市では江戸時代より綿の栽培や養蚕が盛んに行われていました。原田元治郎氏は明治14(1881)年に自宅を改造して製糸業を開始し、明治19(1886)年に新たに工場を建設し、本格的な操業を進めました。明治40(1907)年には「**原田式動力織機**」を開発し機械化に成功しました。さらに改良を加えたタオル織機も考案するなど、纖維産業の発展に貢献しました。

星田の塙辺丑治郎氏は大正5(1916)年に歯ブラシ工場を建設します。製品は明治31(1898)年に開通した片町線（現在のJR学研都市線）によって各地に出荷されました。

そのほか、江戸時代以来続く交野の伝統産業の一つに石工技術があります。本市の山間部では露出した花崗岩が多く分布し、特に良質な花崗岩が採取される私市地区と寺地区を中心に石切場があります。私市地区の石は目が詰まりやや青味がかかり、寺地区の石はやや黄色味がかかる特徴があります。こうした石切場は、昭和30年代前半頃まで存続しましたが、現在では石材店が私部地区などにわずかに残るのみです。神社の鳥居、石橋や石灯籠などは地元の石材を用い、地元の石工により手がけられました。昭和40年代までの墓石等の石造物は、地元の石工の手によるものとみられています。

花崗岩と優れた石工技術による代表的な工作物としては、天野川・尺治川の合流地点付近に、砂防に関する近代土木遺産「**天野川砂防堰堤**」、「**尺治川砂防堰堤**」、「**尺治川床固工**」があり、国登録文化財になっています。この中には、明治時代の淀川治水事業に深く関与したオランダ人技術者のヨハネス・デ・レーケの指導によって作られた堰堤もあります。この付近には、大正12(1923)年の台風により大きな被害を受けた私市地区等の水田復興のため、西村忠逸氏が整備した「**加賀田用水**」の取水口等の設備も現存します。



交野無尽金融株式会社本社屋設計図



原田式動力織機（模型）



加賀田用水の取水口（私市地区）